

辻集落の山城と旧国鉄篠山線に ついての研修

京都府立大学文学部歴史学科 2 回生
西垣 剛志

はじめに

平成 26 年（2014）9 月 4 日の 9 時から、篠山市の辻公民館にて津田博利氏から辻集落における山城整備についてお話をうかがった（写真 1）。津田氏が活動する辻集落は、中世に丹波で大きな勢力を持った波多野氏の家臣の波々伯部氏が拠点を置いた地域であり、波々伯部氏によって淀山城、東山城、南山城という 3 つの山城が築かれた。辻集落の東方で京都からの山陰道と大阪からの街道が交差し、そこから山陰道を通して八上城方面へと向かうには、必ずこの地域を通過しなければならない。研修では波々伯部神社の氏子 8 か村の歴史や集落にある 3 つの山城の由来、津田氏の活動する「辻を知ろう歩こう会」などについてお話しいただいた。第 1 節では、津田氏からの聞き取りと、それに続いておこなわれた質疑応答の内容について述べる。

辻集落での研修の後、研修参加者の一部は篠山市街へ移動し、10 時 30 分から篠山市民センターにて一般社団法人ノオトの松本剛氏から旧国鉄篠山線の保存と活用についてのお話をうかがった（写真 2）。篠山線は現在の篠山市にあたる多紀郡内の篠山口駅から福住駅までの 17.6km を東西に結んでいた鉄道路線で、昭和 47 年（1972）に廃止された。研修ではその開通から廃止までの歴史や、平成 24 年（2012）に廃線 40 周年のシンポジウムを開催して以来、松本氏が中心となっておこなってきた活動についてお話しいただいた。第 2 節では、松本氏からの聞き取りと、その後の質疑応答の内容について述べる。

1 辻集落における山城整備

(1) 津田博利氏からの聞き取りの内容

津田氏によると、辻集落には波々伯部氏の本拠となった 3 つの山城を始めとして重要な遺跡が多くあるにもかかわらず、集落の歴史を知らない人が多くいたという。そこで、自分たちの住む辻集落の歴史を知り、後の世代に引き継ぐために平成 16 年（2004）に日置地区の中野卓郎氏の協力を得て会の活動を始めた。当初は年に数回、中野氏の案内で集落内の史跡見学をしていたが、活動の範囲を辻集落から波々伯部神社の氏子 8 か村、篠山市内へと広げていった。平成 21 年（2009）には篠山築城 400 年祭の協賛イベントとして、波々伯部氏の居城であった淀山城の登山道などの整備をおこなった。それ以降も他の山城や登山道の整備、案内看板の設置などの活動をしている。以前の淀山城は観光ガイドでも荒れていると記されていたが、現在では多くの人が訪れており、整備を行ってよかったという。

また、会では一般社団法人ノオトと連携した活動もおこなっている。平成 24 年からは 2 年間の補助金を得てノオト主催のトレッキングツアーを開催し、好評を得た。このように月 1 回の活動をおこなっていると、住民の関心も高まってきたそうである。さらに、丹波市など他の地域で活動する団体との交流もある。現在これらの活動は、60 歳を過ぎて社会の一線を退いた人が中心となっておこなっている。しかし会の目的は地域の歴史を



写真1 「辻を知ろう歩こう会」の津田博利氏からお話を伺う



写真2 NOTEの松本剛氏からお話を伺う

新しい世代に引き継いでいくことであるから、一過性の活動でなく、今後も継続していくことが重要であるという。

(2) 質疑応答の内容

山城の整備で、どのような経緯でノートと連携するようになったのかという質問が挙がった。これに対して、1回目の山城の整備を発表した時にノートの田中豊茂氏と知り合いになってからノートとの付き合いができ、一緒に山を歩いたりするうちに辻で何かをしようということになり、イベントを行うようになったとの回答をいただいた。整備によって他の地域から辻にある山城へ訪れる人が増えており、イベントでも神戸や大阪からの参加者があった。現在はインターネットがあって情報が流れるので、それを見ていろいろの人が来ているという話をよく聞くという。インターネット上にも訪問記が掲載されていたりして、多くの人が訪れていることがわかるとのことであった。

淀山城は16世紀の明智光秀による波多野攻めの際に廃城になったが、その後どのように伝えられ、集落内で山城の存在がどの程度認知されていたのかという質問に対して、津田氏は伊能忠敬が篠山を測量した際に淀山城址のことを述べているほか、明治時代の村誌にも城址のことが記され、山の頂上には明治時代に建てられた波部氏の記念碑があると語った。しかし、津田氏自身は子どものころに

淀山城のことを知らず、山城の豎堀を滑って遊んでいたという。さらに、5年前にイベントで案内をしたときも集落に住む人から「集落にこんなものがあったのか」と驚かれることもあり、地元の人も知らないような状況になったのは、近年のここ数十年の間のことと考えているとのことであった。

篠山市の波々伯部神社は、境内に梵鐘を吊るす鐘楼や不動明王像などが残っているように、かつては神仏習合で寺と神社が同じところにあり、明治元年（1868）の神仏分離令まで祇園寺という寺があったという。辻もその波々伯部神社の氏子8か村の一つであるが、8か村内で日常生活や神社の祭礼においてどのような交流があるのかという質問が挙がった。津田氏によると、祭礼を媒介とした交流があるが、それ以外でも日ごろから波々伯部地域が一体となった交流があり、昔は山の整備も共同で作業していた。8か村の間には良い意味での競争意識もあり、祭の維持も少子高齢化で大変になってきているが、協力して継続しているという。

また、津田氏はかつては神社の祭礼において何でも辻が1番という時代もあったと聞いており、辻が波々伯部地域の中心であるという意識もあったようだが、現在の集落にはそのような意識はあまりないという。婚姻関係についても昔は波々伯部8か村の内部が多かったかもしれないが、交流が広まると婚姻関係も広がってきたとのことであった。

辻の自然環境の保護について、会の今後の

取り組みとして、辻の自然環境の保全に努めることが挙げられており、具体的にどのようなことをするのかという質問が出た。これに対しては、具体的に何かをしているわけではないが、これから進めていきたいという回答をいただいた。その上で、遺跡の整備を進めるのと同時に、昔からの田舎の風景や自然の動植物のある環境は壊さず守っていききたいという。辻の貴重な植物としては多紀連山にクリンソウの大群生地があり、津田氏自身も辻を知ろう歩こう会の活動とは別に、植物に詳しい辻集落在住の先生の紹介でクリンソウを守る会に入っているという。会ではいろいろな植物のことを教えてもらえるので、辻の植物のことも調べ、クリンソウなどの希少種や絶滅危惧種を守っていききたいとのことであった。

2 廃線跡の保存と活用

(1) 松本剛氏からの聞き取りの内容

篠山線が建設された背景には戦争があったという。篠山盆地内の福住地区や村雲地区などでは良質なマンガンや硅石が採掘されていたが、昭和12年(1937)からの日中戦争の激化に伴って製鉄用にこれらの鉱石の需要が高まり、鉱石を運び出すために昭和17年(1942)から昭和19年(1944)にかけて建設された。建設には地域の住民も動員され、17.6kmの線路を1年半ほどの短い期間で建設した。

戦争が終わって鉄鋼の需要が減ると、篠山線の輸送量も減少したが、朝鮮戦争が起きた昭和25年からの数年間は再び活気を取り戻した。この数年間は篠山線が最も輝いていた時代だったのではないかと松本氏は語った。朝鮮戦争が終わると篠山線は再び赤字路線になり、昭和43年(1968)には国鉄の赤字83線のひとつとして廃止が答申され、昭和47年(1972)2月29日に廃線となった。篠山線の施設は廃止後にその多くが撤去されたが、現在でもいくつかの遺構が残っているという。

松本氏は篠山市の城東公民館に勤務してい

た際に篠山線跡の写った航空写真を発見し、そのことをきっかけに篠山線に興味を持ったという。篠山線が廃止された昭和47年はドイツのミュンヘンでの夏季オリンピックやアメリカの大統領選挙、山陽新幹線の部分開通といったイベントがあった年で、さらに廃止日が4年に1度しかない2月29日でもあったことから、篠山線に対してドラマチックなイメージを持ったという。そして、このイメージを前面に押し出して何かできないかと考え、廃線から40周年となる平成24年に記念シンポジウムをおこなった。

当初は篠山市内の住民に興味を持ってほしいと考えていたが、実際におこなってみると篠山市外からの反響が大きく、参加者約100名のうち6割は篠山市外から来ており、東京、神奈川といった遠方からの参加者もあった。さらに、その2年後の今年、平成26年は篠山線の開業70周年であり、この半年間記念展やサイクリングツアーなどのイベントをおこなってきた。

松本氏はノートにおいて地域資源を活用した観光創造事業をおこなっているが、地域資源として扱われにくい部分であるサブカルチャーの世界に特化したツアーを企画した。ツアーでは廃線跡を自転車ですたどっていき、体験プログラムとしてレールの敷設作業をしたり、昼食として駅弁を食べたりした。ツアーの参加者の多くは30代から40代の女性だった。松本氏によれば、この人たちは当時を知っていて懐かしむために廃線跡を追いかけているわけではなく、当時を知らないからこそ興味を持って廃線跡を見ることができのではないかと考えているそうである。他の地域との連携については、篠山線と同じく赤字83線のひとつだった鳥取県の若桜鉄道との連携があり、ツアーのパンフレットを置いてもらうなどしているという。

(2) 質疑応答の内容

篠山線の活用を通してどのようなことを目指しているのかという質問が出た。これについては、廃線跡の活用を通して何かをしようというビジョンを持っているわけではなく、ビジョンを持ってくれる人に機会を与えられ

ればよいと考えているとの回答をいただいた。機関車など形のあるものを残そうとすれば、労力やお金や人の力がかかるので大変である。今の篠山線には形のあるものはほとんど残っていないが、当時の画像や資料のほか、人から聞いた話（ストーリー）は数多くある。そのストーリーを伝えていくこともひとつの保存方法だと考えているという。そして、それを集積したものを多くの人に提供し、提供を受けた人がそれをどう活用するかを考えてくればよいとのことであった。

廃線 40 周年のシンポジウムをきっかけに「チームリボン篠山線」というグループを立ち上げたが、このグループはできる人ができる時にできることに参加してくればよいというもので、そうすることで疲れたりせずに長く続いていくのではないかと考えているとのことであった。また、廃線跡の活用にはいろいろな方法があるが、形あるものはいつか壊れるので、できるだけ記録に残し、同時にハード面も進めていきたいという。

篠山線の活用で問題となることや難しいことは何かという質問が挙がった。松本氏によれば、最も活動の問題となるのは目に見えない時間であるという。それは篠山線というすでに過去になったものを現在に引っ張り出そうとしているため、篠山線ができた頃を知っている人はあと 10 年経てばいなくなってしまうし、高校生の時に利用していた人でも遠い昔の記憶はどんどん薄れていく。また、40 周年、70 周年という時間のタイミングが重要で、何かきっかけがあれば人は動きやすい。ツアーなどのイベントも開業 70 周年ということをメインに据えることで、報道機関が取材に来てくれたり、逆に情報が拡散していったりしているという。

篠山線跡ツアーの企画はノオトが主催しているが、どのようにして組織の中で企画を上げていくのかという質問が出た。松本氏は、自分が正しいと思えば突き進めていけばよいが、組織の中では踏むべき手順をきちんと踏んでいく必要があり、特に組織と組織の中でのつきあいでは、大人の対応が必要であると語った。また、人と接するときには楽しいことを作り上げるためには、楽しい対象を第三者にして、自分の観点でなく人の観点で見ると

うにするべきで、観光創造についても地元住民の見方だけでなく観光客の目線で、篠山線に興味を持つ人がいればその人をどう囲い込むかの方法や手段を考えればよいという回答をいただいた。

おわりに

この研修で訪れた辻集落の山城や旧篠山線は、どちらも津田氏や松本氏などの活動によって文化遺産として見直されるようになった事例である。辻集落では、津田氏をはじめとする辻を知ろう歩こう会やノオトの田中氏などによって山城跡の整備やそれを活用したイベントがおこなわれ、地域の歴史に対して住民の関心が高まりつつある。篠山線については、松本氏が中心となってシンポジウムやツアーなどの活動をおこない、廃線跡を新たな観光創造の資源としている。

松本氏が篠山線にまつわる人々のストーリーを伝えていくこともひとつの保存方法であると語るように、地域に残る山城や廃線跡などの文化遺産は地域住民の記憶と結びついており、文化遺産を後世に継承していくことが地域の記憶を継承していくことにつながると考える。今後は両者の活動にさらに注目していきたい。

【謝辞】

末尾になりますが、今回の研修でお世話になった辻を知ろう歩こう会の津田博利様、一般社団法人ノオトの松本剛様、田中豊茂様、聞き取りに応じてくださった地域住民の皆様には深くお礼申し上げます。

【受贈資料】

辻を知ろう歩こう会（作成年不明）『辻を知ろう歩こう会の活動報告』A4、3 枚
 田中豊茂（2014）『波々伯部の歴史』A4、冊子
 松本剛（2014）「京都府立大学フィールド研修資料 あの頃は汽笛が聞こえた」A3、3 枚
 同上（2014）「地図（廃線跡の位置関係を示す）」A4、1 枚
 一般社団法人ノオト（2014）「国鉄篠山線廃線跡サイクリングツアー」A4、1 枚